湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ

大学名：湘南医療大学
所　属：保健医療学部
リハビリテーション学科
作業療法学専攻
名　前：宮内　貴之
作成日：2024 年 9 月 4 日

1. 教育の責任

湘南医療大学の理念である「人を尊び，命を尊び，個を敬愛す」に基づき，「幅広い教養教育」とエビデンスに基づいた医療の提供できる医療従事者の養成を使命としている．また，地域社会に貢献できる職業人を輩出することが目的である．学生に対して作業療法の基本的な技術から作業療法を用いたリハビリテーションの提供，作業療法の可能性を担当科目にて教示し，幅広く活躍できる人材育成を目的として授業を進めている．また，卒前教育と卒後教育のギャップの解消のためにも，授業内容も国家試験に対する事柄のみではなく，臨床で役立つことや臨床ベースで講義を行う機会を多くとる．総合臨床実習を始めとした各実習では，ソーシャルスキルの獲得に対する指導やより実りのある実習となるよう学生指導を行う．臨床ベースでの教育は，臨床をつい最近まで行っていた私が行う必要があると考え，積極的に取り組んでいる．

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私の教育に対する理念は，「刺激的な日々を送る」である．これは，私自身にもあてはまり，学生にもそのような日々を送ってもらいたいという思いがある．私自身，刺激的な日々を送ることで研究や講義を通して作業療法の奥ゆかしさや学生教育の難しさや楽しさを知ることで，自身の成長につながると考えている．もし，私が刺激的な日々を送れていないと感じているようであれば，それは私自身が現在楽しさや面白さを感じていないということになるだろう．これを学生に置き換えれば，日々の勉強で作業療法の楽しさや面白さを見いだせていないということになる．学生は，私や現在の臨床家よりも無限の可能性を秘めている．その無限の可能性を潰さずに，可能性を拡げられるようサポートし，日々を過ごしていくことが私の刺激的な日々を送ることにもつながっている．そのため，私自身も「できない」と決めつけず，学生にも「できない」と決めつけず，共にチャレンジをし続け，走り続けられるよう日々考えながら過ごしている．

2) 理念をもつに至った背景

私は回復期病院で 2 年間，大学病院で 9 年間作業療法士として臨床を主戦場としてきた．その中で感じたことは日々変化する患者さんや環境に対する面白みである．養成校を卒業してから 2 年間はリハビリテーションの神髄といえる回復期病院にて患者さんが社会復帰に向けての援助を勉強した．その後，より高度な医療モデルである大学病院にて，医療を知りたいと思い転職した．大学病院での 9 年間はとても刺激的であり，初めて経験するという日が多く，毎日が刺激的であった．自身の知識に対する探求心を奮い立たせられたり，研究発表を行うことで医学に貢献する，など

成長には十分すぎる環境であった．同時に作業療法士として何ができるか，も考えさせられた．経験年数が上がるにつれて，後進育成といった教育にも携わるようになった．このように臨床家時代の日々の初めての経験や立場の変化による思考の変化など，考えることや行動しなければいけないことが変化し続けており，「刺激的な日々を送る」が私の理念となり，教育や研究に熱意をもって取り組める糧となっている．

3. 教育の方法・戦略

私が行っている教育方法は学生が主体的かつ積極的に授業に取り組めるように実技やグループワーク，事例検討などアクティブラーニングを積極的に取り入れている．また，国家試験対策に留まらず臨床で役立つ知識を共有し，臨床家となった時に役立つよう授業を進めている．座学も一方的に話すのではなく，板書を促したり，学生に質問をしながら相互交流を図っている．

私の研究分野である高次脳機能障害に関する授業では，自己研鑽を通して，自身の知識のアップデートを日々行い，最新の知見やトピックを学生に提供できるよう努力している．また，高次脳機能障害学は苦手意識を持つ学生も少なくないため，臨床時代に経験した事例の動画（事例より承諾は得ている）を活用し，より分かりやすく理解できるように心がけている．

授業以外の諸活動としては日本集中治療作業療法研究会の役員や学術誌・学術大会抄録の査読委員を通して，作業療法士のスキル向上や学術としての発展に貢献をしている．これらのことは，ただ教育をするのではなく，共創・共走といった自身の教育にも繋がっている．また，神奈川県作業療法士会の代議員として，県士会の運営にも少なからず携わっている．地域貢献では，自分の住む街へ貢献できるよう作業療法士の目線から横浜市福祉のまちづくり推進会議委員として活動している．

研究面では１年間で１論文は掲載されるよう臨床時代から継続した研究活動を行っている．研究内容は高次脳機能障害に関することが主であり，他大学の教員や臨床家とコラボレーションしながら研究活動を継続している．

・アクティブラーニングの積極的な使用
・授業中の相互交流
・動画の使用
・各種役員・委員としての共創・共走
・地域への貢献
・継続した研究活動

4. 学習成果

【授業評価】

・授業中に実技時間を長くとってくれてありがたかった.

・スライドがあることで，理解しやすかった.

・スライドに記述することで覚えることに繋がった.

【教育活動に関する発見やアイデア】

・アクティブラーニングの重要性

・動画を用いた解説

5. 改善のための努力

学習成果にて記載したとは反対の意見もあった.

・授業中の実技時間の不足

→実技時間の不足に関しては，1 コマで行う量の再考を行い，各実技で十分な時間を取れるよう細かな時間調整を行う必要がある.

・板書する量

→板書する量に関しては，居眠り予防という観点からも板書を行ってもらっているが，量に関して重要な部分を抽出し，板書を行うようにする.

6. 今後の目標

長期目標は，卒後教育と卒前教育のギャップをなくし，卒前から卒後までサポートし，作業療法士として，誇りをもって働ける学生を数多く輩出することである．また，研究分野でも卒業生や臨床家と協業して医学の発展に貢献することである．学生に対しても最新の知見を研究から学べるよう伝えられるようにする.

短期目標は，1 年に設定し，私自身の博士号の取得を目指し，研究に関する指導がより一層行えるように努力する．また，後期授業より前期授業での反省点を基にアクティブラーニングや相互交流のある授業を展開していく.

【添付資料】

なし

【参考資料】

・学生アンケート（試験内回答のため，添付不可）

・2024 年度　シラバス

・Miyauchi, T., Sasaki, S., & Tanemura, R. (2024). Behavioral Problems and Self-Feeding Independence Among Patients With Acute Stroke: A Single-Center Study. *The American Journal of Occupational Therapy*, *78*(5), 7805205080.
・Miyauchi, T., Sasaki, S., Sasaki, Y., Mogamiya, T., Tanemura, R., & Shirahama, K. (2023). Observational Rating Scale of Attention Function is Associated with Independence in Activities of Daily Living. *Asian Journal of Occupational Therapy*, *19*(1), 236-242.